

学位請求論文審査報告要旨

2012年7月11日

申請者 劉 洋

論文題目 情報の焦点化に関する中日対照言語研究

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
井上 優

1. 本論文の内容と構成

本論文は、中国語と日本語における情報の焦点化に関わる問題について論じたものである。中国語と日本語の対照研究はこれまで数多く存在するが、情報の焦点化に関する中日対照研究はかならずしも多くはない。類型論的には、中国語は典型的な孤立語と考えられる一方、日本語は膠着語に分類されるのが通例で、両者はかなり構造の異なる言語と考えられているが、焦点は中国語と日本語に共通して存在する、情報の伝達を考えるさいに欠かせない概念である。

焦点に関する研究は、欧米の言語でなされているものが中心で、構文論的、意味論的なアプローチからなされることが多い。それにたいして、本論文は、機能論的なアプローチから情報の焦点化に着目し、中国語と日本語が共通に備えている、情報を焦点化する手段が、実際の運用の際にどのような共通点と相違点をもっているかについて考察したものである。

本論文の構成を以下に掲げる。

第1章 本研究の目的と方法

- 1.1 研究の目的
- 1.2 研究の方法
- 1.3 本研究の構成

第2章 焦点に関する先行研究の概観

- 2.1 焦点の定義
- 2.2 焦点の分類
- 2.3 日本語と中国語における焦点化の手段
- 2.4 まとめ

第3章 音声的強勢機能における中日対照

- 3.1 はじめに
- 3.2 音声的強勢
- 3.3 対比を表す焦点化
- 3.4 強勢によるニュアンスの発生

3.5	中国語の強勢の使用
3.6	まとめ
第4章	ハ分裂文「AのハBダ」の使用条件について
4.1	はじめに
4.2	問題提起
4.3	既出情報・喚起可能情報・総括情報・喚起困難情報
4.4	ハ分裂文が必須である場合
4.5	ハ分裂文が選択されやすい場合
4.6	まとめ
第5章	“A的是B”構文の使用について
5.1	はじめに
5.2	焦点化される成分
5.3	先行文脈との意味関係からみた焦点化の特徴
5.4	談話展開機能
5.5	まとめ
第6章	論述文における“(是)……的”構文と「ノダ」文の使用について
6.1	はじめに
6.2	“(是)……的”文について
6.3	焦点化される成分
6.4	論述文における機能
6.5	まとめ
第7章	まとめと今後の課題
7.1	本研究のまとめ
7.2	今後の課題
	参考文献
	例文出典

2. 本論文の概要

本論文は、中国語と日本語の両言語において、音声的強勢、および「A的是B」構文と「AノハBダ」分裂文、「(是)……的」構文と「ノダ」文といった統語的な手段により、情報の焦点化がどのように行われているか、また、そのような情報の焦点化により、どのような表現・談話機能が生じているかを分析・考察したものである。全7章からなる。

第1章では、本研究の目的と研究の方法が述べられる。

中日両言語では、情報を焦点化するのに、音声的手段、形態的手段、統語的手段（構文の選択、語順の選択）が用いられる。本論文は、そのうち、中国語と日本語に共通に備えている音声的手段と統語的手段（構文の選択）を研究対象として選定し、それが、現実の運用において、中日両言語にどのような共通点と相違点が見られるかを探るという研究の目的が語られる。

一方、研究の方法としては、機能論のアプローチから、談話のレベルで中国語と日本語の情報を焦点化する手段について考察することが宣言される。また、説明に用いる用例は実例を原則とし、とくに新聞記事、文学作品、論文など、書き言葉を中心とした用例を用いること、分析の方法としては、記述する対象により、必要に応じて適宜質的研究と量的研究を使い分けるという方針が示される。

第2章では、先行研究を概観し、研究史における本研究の位置づけが示される。

本章で挙げられる先行研究は、焦点の定義、焦点の分類、焦点化の手段の3つの面から整理されている。

焦点の定義については、先行研究に従い、音声、情報の新旧、情報の重要度及び意味論の4つの観点に分けて紹介されている。また、焦点の分類については、機能的な立場からの分類と形式的な立場からの分類の2つに分けて整理され、焦点化の手段については、それぞれ音声的手段、形態的手段、統語的手段（構文の選択）、統語的手段（語順の選択）の四つを用いることが述べられている。

第3章では、中国語と日本語における音声的手段の機能の相違が考察される。

中国語においても日本語においても、音声的強調は情報を焦点化する手段として用いられるとこれまで考えられてきたが、実際の使用においては、日本語の音声的強勢と比べて、中国語の音声的強勢の焦点化する力が弱く、機能が少ないことが明らかにされている。

日本語では、音声的な強勢を置くだけで、対比、事態実現の早さ・遅さ、比較する基準の程度の高さというニュアンスを出せるのにたいして、中国語では、これらの場合、強勢だけでは表すことができず、形態的手段または統語的手段を併せて用いることが必要であるとされる。

具体的には、“是”判断文と形容詞文の前項名詞句に焦点をあてて対比を表す場合は、音声的強勢だけでは表すことができず、副詞“才”（日本語の「こそ」に相当）を使う必要がある。また、未実現の動作行為に関与する項が対立する場合は、“是”を用いたほうが自然であり、実現済みの動作行為にたいする「動作の仕手、時間、場所、方法、目的」などの関与項に焦点を当てるときには、「（是）……的」構文を使う必要がある。事態実現の早さ・遅さに焦点を当てるときは、中国語では副詞“就”（日本語の「もう」に相当）又は“才”（日本語の「やっと」に相当）を用いる必要がある。比較する基準の程度の高さというニュアンスを出す場合は、中国語では“還”（日本語の「もっと」に相当）又は“更”（日本語の「さらに」に相当）のような副詞を用いる必要があるとされる。つまり、中国語においては、音声的強勢は補助的な働きにとどまり、形態や統語的な手段ですでに焦点化された成分をさらに強調したり、自然焦点である文末成分が対比や意外性を表したりするといった機能にかぎられる。

第4章では、日本語の「AノハBダ」というハ分裂文の使用を選択する要因が考察される。

日本語のノハ分裂文の選択については、先行文脈から引き継いだ情報をノハによって前置させて理解の前提になることを示し、それ以外の情報を後置させて焦点を当てると考えるのがこれまでの有力な説である。本章では、こうした研究史を踏まえ、前置要素Aと後置要

素 B がそれぞれもつ情報上の特徴と継続・対比の連動性の観点から、日本語の情報を焦点化する構文手段である「A ノハ B ダ」文の使用条件について、より厳密な検討が加えられている。

具体的には、A が既出情報で、B が喚起困難情報であり、かつ B が先行文脈で導入されたある不特定な事物を特定する場合は、ハ分裂文の使用が必須である。一方、ハ分裂文が使われやすい場合は、(i) A が既出/喚起可能情報で、B が喚起困難情報である、(ii) A、B とも既出/喚起可能情報である、(iii) A が総括情報で、B が喚起困難情報である、という 3 つのパターンに分けられる。(i) では、B の継続が主な選択要因であり、B の対比が副次的選択要因、(ii) では、B の対比が主な選択要因で、B の継続が副次的選択要因、(iii) では、A の継続が選択要因であるとされている。

第 5 章では、日本語の「A ノハ B ダ」文との対照のなかで、中国語の「A 的是 B」構文の使用について考察が行われる。

「A 的是 B」構文の焦点化のタイプは、先行文脈との意味関係から「特定焦点化」「特立焦点化」「対比焦点化」の 3 つに分けられる。この 3 つのタイプの焦点化は、いずれも日本語にも存在しているが、日本語の「A ノハ B ダ」文に比べた場合、それぞれ異なる特徴を備えている。「特定焦点化」の場合、前項 A の情報量が少なく、動詞の繰り返し使用が多い、「特立焦点化」の場合は、前項 A が程度副詞を伴い、使役的表現や形容詞が多用される、「対比焦点化」の場合は、表現効果を強めるために対比関係をもつ複数の「A 的是 B」を並列させるのが、「A 的是 B」構文の特徴であるとされる。

後続文脈との関係から見ると、「A 的是 B」構文は「主題展開」「談話収束」という 2 つの談話展開機能をもつ。この 2 つの機能は、日本語の「A ノハ B ダ」文にも共通するが、「A 的是 B」構文においては、「主題展開」の場合は、後項 B が前項 A の主語のときのほうが後続文脈の主題として長く続くことがその特徴であり。また、「談話収束」の場合は、「A ノハ B ダ」文においては、後項 B の情報価値が低く、自然消滅的に談話が収束しているのに対して、中国語においては、後項 B の情報価値が高く、特定または特立、対比のいずれかの形で B に重点を置いて談話を結ぶのがその特徴であるとされている。

第 6 章では、情報を焦点化する機能をもつ中国語の「(是) ……的」構文と日本語の「ノダ」文について、焦点化される成分の偏りと談話における機能の 2 つの面から、論述文での使用のさいの共通点と相違点が考察される。

焦点化された成分の面では、必須補語の焦点化は「(是) ……的」構文と「ノダ」文でほぼ同じであるが、「(是) ……的」構文は状況語を焦点化するのが多いのに対し、「ノダ」文は述部や文全体を焦点化する場合が多い。

談話における機能の面では、「(是) ……的」構文と「ノダ」文が「対比」を表す機能を共通にもっている。

相違点は、後続文脈との関係においては、「(是) ……的」構文における焦点化された成分が「主題導入」機能を果たすことが多いのに対し、「ノダ」文はこのような機能をもっていない。一方、「ノダ」文は、「(是) ……的」構文に見られない「問題点の提示」機能をもっている。また、先行文脈との関係においては、「ノダ」文は、先行文脈から導かれた結

論を提示する「結論の提示」機能を果たすことが多いが、「(是)……的」構文はこの機能を果たす場合が少なく、副次的な機能であり、原因と条件から導かれた結論を提示したり、換言して結論を提示したりする機能をもっていないとされる。

第7章では、上述の内容がまとめとして示され、今後の課題が述べられる。

3. 本論文の成果と問題点

本論は、全体として見れば、「焦点」に関する未解決の問題を提示し、それに一定の解答を与えたというものではない。先行研究についてまとめた第2章は、日・中・英の重要文献は網羅されているものの、かならずしも先行研究の総括と未解決問題の提示という体裁になっておらず、また、まとめである第7章でも、「焦点」に関する理論的貢献についてはとくに触れられていない。

しかし、各論である第3章から第6章は、それぞれ日本語と中国語の「焦点」に関わる表現の機能について、それぞれ興味深い詳細な観察と分析がなされており、読みごたえがある。

たとえば、中日両言語の音声的手段の機能の相違について論じた第3章は、音声的強調(プロミネンス)が焦点化に貢献する仕方が異なるという分析は興味を惹かれる。この点については、デフォルトで述語から最も遠い位置が潜在的に焦点位置になるという、ハリディらが英語で行っている分析などにも連続し、分析がさらに立体的になる可能性を秘めている。また、“才”、“就”、“還”、“更”のような副詞を添えないと音声的強調が加えられないという、中国語に見られる特徴は、日本語とは明らかに異なるものであり、筆者のきめ細かな観察眼が生かされた記述であろう。

また、第5章は、全国規模の学会誌に掲載されたものがベースになっており、精緻な内容となっている。「特定焦点化」「特立焦点化」「対比焦点化」という三つの焦点化に分けて整理を施し、日本語の「AノハBダ」文との対照のなかで中国語の「A的是B」構文の特徴を的確に浮かびあがらせている。その意味で、本論文は、日本語と中国語の「焦点」に関わる表現の対照研究として十分な価値を持つものである。

また、全体として、安定感のある記述も好印象である。従来の先行研究を十分に読みこみ、それを消化したうえで、そこには見られないオリジナリティを出そうとする論の組み立て方、内省にくわえて定量的な手法も併用し、自らの主張を客観的に描き出すバランス感覚、いずれも言語研究者に必要な資質を十分に備えていると考えられる。

さらに、学際的な裾野の広がりを感じさせるのも本論文の優れた点である。中日両言語の特徴について、焦点という一貫した観点から、情報構造、談話機能、表現効果といった多面的な側面を視野に収めて議論できているため、比較によって初めて見えてくる特徴を整理したという点で対照言語学としても評価できるし、焦点という概念を軸とした言語類型論に寄与する力も感じさせる。さらには、情報構造への着眼という点で自然言語処理に、談話展開機能への着眼という点で談話分析に、表現効果への着眼という点でレトリック研究につながっていく萌芽も感じさせる。もちろん、全体をとおして、日本語教育および中国語教育での

作文教育などにも応用しうる内容であり、このような裾野の広い学際性が本論文の大きな特長である。

このように優れた面を備えた本論文であるが、一方、問題点もいくつか存在する。

本論文の題目は『情報の焦点化に関する中日対照言語研究』であるが、そこに含まれる「情報」とは何かという点で、議論にしばしばブレがあるように感じられる。焦点化されているのは、「情報」であるはずなのに、しばしば「表現」が焦点化されているように記述されてしまうことがある。そのため、「情報」とは何かは今ひとつはっきりしないきらいがある。また、「焦点」という用語にしても、先行研究に基づく多面的な捉え方を踏襲しているために、筆者自身が考える「焦点」が章ごとに微妙にズレているような印象があった。今後研究を進展させていくにあたっては、「焦点」という用語をあえて排し、実態に即して記述していく姿勢が望まれるだろう。

また、焦点の議論に集中するあまり、議論の前提を端折る傾向がある点にも問題を感じる。上述のように本論文は学際性を備えているにもかかわらず、筆者自身はその点についてかならずしも自覚的でないため、焦点以外の研究にはあまり触れられない傾向がある。また、研究の前提となる用例も、なぜ書き言葉、とくに文学作品や論述文を中心に用例を収集したのか、その理由が述べられないままであるし、扱われている形式が、音声的強勢、「A 的是 B」構文、「A ノハ B ダ」分裂文、「(是) ……的」構文、「ノダ」文にかぎられ、それ以外の形式が取りあげられなかった理由にも触れられていない。さらに、たとえば、第6章で分析対象としている「(是) ……的」構文で取りあげられているのは「焦点」型のみであり、「背景解説」型は分析対象から除外されているが、その意図もはっきりしない。このように、議論の前提になる部分の説明が不十分である点は、不満の残るところである。

しかし、こうした問題点は、本論文がもたらした、豊かな学術的成果の価値を大きく損なうものではない。また、個々の問題点について、本論文の筆者にも十分な自覚があり、筆者の今後の活躍によって克服されることが期待できるだろう。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
庵 功雄
井上 優

2012年6月20日、学位請求論文提出者、劉洋氏の論文「情報の焦点化に関する中日対照言語研究」にかんする疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのにたいし、劉洋氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、劉洋氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。